

群 教 七	F09 - 01
	平16.224集

不登校生徒への対応・支援体制づくり

— 「ほっとルーム」を核とした

組織的なチーム援助を通し、学級復帰を目指す —

特別研修員 小幡 今朝雄（孺恋村立東中学校）

研究の概要

本研究は、不登校傾向生徒が増えている今日、その対応を担当に任せるのではなく、教職員のもっている資源を有効に活用させ学級復帰を目指すものである。そのためには、担任中心の指導から、生徒指導部会を中心に「ほっとルーム」から見えてきたことに対しチームを作り、組織的に援助を行う。そして、生徒指導部会を定例化させ、常に新しい情報を発信し、風通しのよい風土を目指すものである。

【キーワード：教育相談 ほっとルーム 支援 不登校】

主題設定の理由

本校は、全校生徒154名の小規模校。東西2校の小学校からなるが、入学してくる生徒数は東西でかたよが多い。そのため、少人数の中で過ごしてきた学校の生徒は人間関係で悩み不登校傾向になる生徒がいた。しかし、ここ数年、それが原因で学校に来られない生徒はいなくなった。むしろ、不登校傾向にある生徒は家庭での問題や対人関係を築く能力に問題があるケースが多く、各学年数名はいる。今現在、不登校傾向の生徒に対する取組は、それぞれの学年に任せられているのが現状である。そのため、不登校傾向の生徒が学校にきた時に他学年の教員からの一言や授業での声かけ等で不信感を持ち、登校を渋る場面もあった。また、他学年との連携がなされていないために、一部の教員に対し、負担がかかる場面も出てきている。生徒指導委員会は組織としてあるが、実際のところ、問題があったら行う程度で、細部にわたる情報交換・共通理解はされていない。心の相談室も昨年までは相談員が週3回程度学校に来ていたので相談室として活用していたが、今年度は相談員は来ていない。相談室についても、気になる生徒がいた時にチャンス相談をする程度であった。

そこで、不登校生徒や心の居場所のない生徒・コミュニケーションがとれない生徒に対し、「ほっとルーム」を中核とした、生徒指導部会を機能させ、全職員に共通理解を深めながら、組織的な支援体制づくりを行うことを目指した。また、「ほっとルーム」を中核において見えてきたことを、担任だけに任せるのではなく、チーム援助というかたちでチームの構成員が持っている資源を有効に使い、協働するなかで、不登校生徒・心の居場所のない生徒が、「ほっとルーム」から、学級復帰・学校復帰ができると考え、本研究主題を設定した。

研究の問い

本校の課題を踏まえ、その解決に向けた研究の問いは以下の通りである。

各学年で行われた情報交換の内容が、定期的に行う生徒指導部会で情報発信されることによって、共通理解が深まり、支援者の協働意識を高めることができるか。

チーム援助を行う上で、学年としての支援体制を構築し、援助者がどのように支援したらよいか明確にするために「チーム援助シート」は有効であったか。また、不登校傾向生徒の

学校復帰の近道になるか。これらの問いを実践を通して明らかにする。

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 支援体制づくりとは

不登校の対応については、個々の児童生徒の成長・発達を支援する観点から学校の教職員の一致協力した指導体制の確立が大切であり、それぞれの役割について相互理解した上で日頃から連携を密にし、対応にあたるようにしなければならない。そのためには学級担任一人に任せるのではなく、状況に応じて効果的な対応を組織的に行い、コーディネーターが中心となり連絡調整をするなど支援できる体制をつくるものである。

(2) 「ほっとルーム」を核にするとは

「ほっとルーム」の基本的な考え方は、悩みや不安を抱えている生徒に対し、教師、生徒、家庭、地域、関係機関などが積極的なかかわりをもつ中で、分かり合う関係づくりを構築し、自ら考え判断し行動できるよう支援していくことである。よって場所・部屋ではなくどこの場所でも「ほっとルーム」になるという考え方である。「ほっとルーム」を核とするとは、悩みや不安を抱えている生徒自身が核となるということである。そして、その子のニーズ、その子の妨げになっている要因は何かをさぐり、学習面であれば学習機能として、対人関係であれば対人関係能力を身につけさせる場として活用していくものである。

(3) チーム援助とは

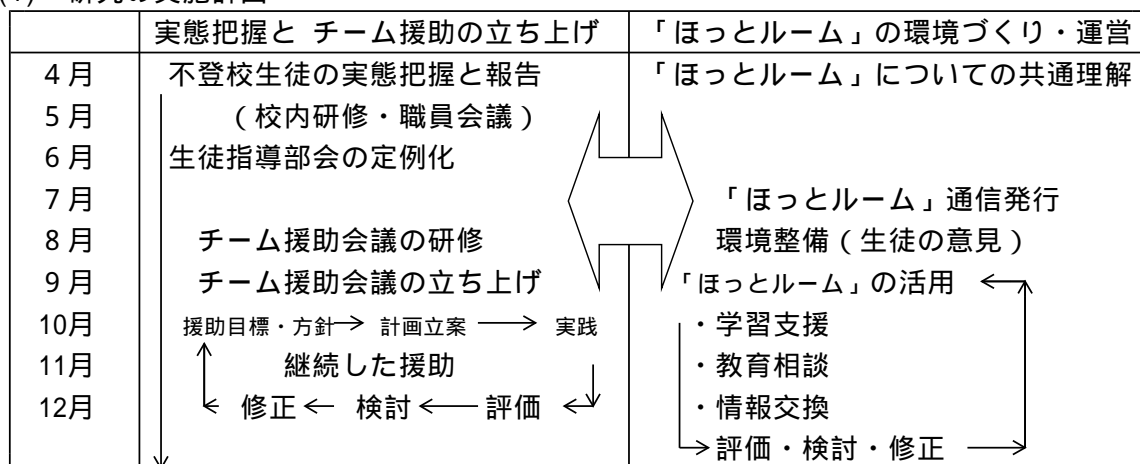
不登校生徒を持つ担任は、日々悩みを抱えている。電話連絡や家庭訪問をしてすぐに結果ができるものではない。学級担任には他の生徒もいる。学級担任の負担を軽減させたいとの思いがあるが、同じ学年や他学年の教員がどのように援助したらいいのか分からないのが現状だと思う。そこで、担任中心の支援体制ではなく同一目標に向かう組織的な援助が有効だと考えた。

チーム援助会議とは、コーディネーターを中心に不登校生徒に対して、かかわりのある教職員（適応指導教室の先生も含む）をチームとし、生徒の実態から援助目標（方針）、具体的な援助案を決める会議である。そして、実践、評価、修正を行いながら進めていくものである。

2 研究の方法

本研究では、チーム援助と「ほっとルーム」運営を中心に円環的な取り組みを目指し、その中で常に評価をしながら軌道修正を行い進めていくものとする。

(1) 研究の実施計画



(2) 研究の全体計画

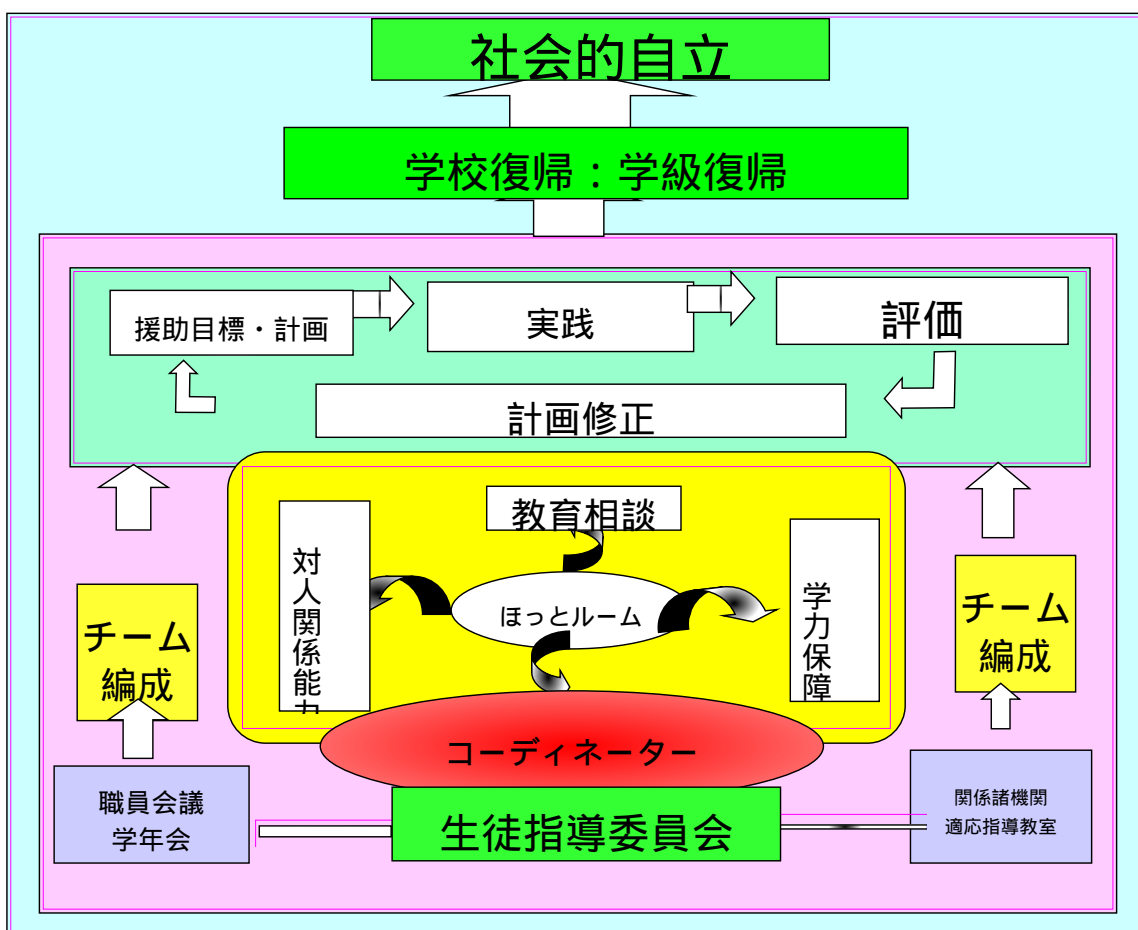


図1 研究の全体計画

研究の実践

1 支援体制の確立に向けた取り組み

本校では、生徒指導部会はあったが、実際のところ問題行動があったときに各学年より担当者を集め行う程度で、定例化はされていなかった。そこで、生徒指導部会を活性化させ、支援体制を確立することをねらいとし、以下のような実践を行った。

<p>【計 画】</p> <p>情報が流れ、共通理解した上での指導ができるよう、新しい組織を作るのではなく、既存の組織・生徒指導部会を活性化させ目的を達成する。</p> <p>職員会議・校内研修での生徒指導の位置づけ。</p> <p>チーム援助の推進 コーディネーター的な役割の選出。</p>
<p>【実 践】</p> <p>給食持ち寄りで生徒指導部会を定例化する。特に情報交換が中心。</p> <p>時間がとれないので、校内研修と職員会議のある週はその場で情報交換を行い生徒指導部会は設けない。</p> <p>校内研修でチーム援助について説明をする。</p> <p>生徒指導主事という立場を利用し、研究者がコーディネーター的な役割を行う。</p>

【評価】

給食持ち寄りではなく、校時表に組み込んでもらいたいという要望がでる。
 校内研修・職員会議があったとしても、生徒指導部会を取り入れて欲しい。また、生徒指導部会を木曜日に行うと、研究者が金曜日にセンターにいてしまい全体にかかわる面での情報が流れないので前日にして欲しいとの要望。
 チーム援助会議の説明よりも、研究者が実践したことを紹介して欲しいとの要望。
 コーディネーター的な役割として連携はできている。

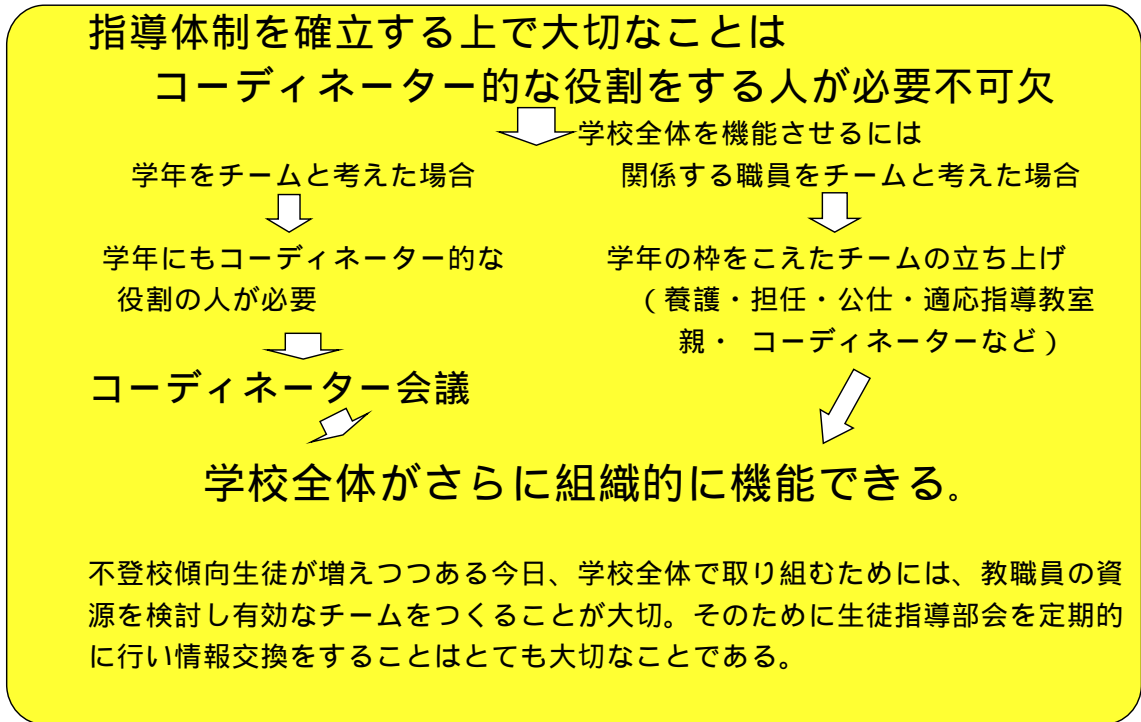
【修正：実践】

生徒指導部会については、管理職・教務主任と相談の上、職員に協力を求め水曜日の4校時に実施。担当者が参加できないときは学年から1名代表で参加。
 チーム援助については実践を紹介。

【評価】

職員に昨年度と比較したアンケートを実施した結果について。
 ・不登校生徒の状況・様子については、昨年度よりもわかるが6割。
 ・情報交換・共有がされているかについては、されているが7割。
 ・組織的な機能は、学年としては機能的だと答えた人が多かったが学校全体では少ない結果だった。
 記述について。
 ・生徒指導委員会が情報交換の場としてよく機能している。
 ・生徒の情報交換はよくなってきた。
 ・生徒指導委員会、週1回はとても自分の立場としてはありがたい。そういう面では組織的と思える。
 ・学級・学年だけでなく、学校全体で取り組むことが大切だと思う。
 チーム援助については、実践を紹介。生徒指導部会でも該当学年の不登校生徒についての方針を紙面で伝えて欲しいという要望がでるようになった。


【支援体制の確立から見えてきた学び】



2 「ほっとルーム」の運営

昨年度まで教育相談員が来ていたが今年度はいない。教育相談員が使用していた部屋を「ほっとルーム」という部屋に改装し、取り組んできた。「ほっとルーム」については今年度が初の取組になる。

【「ほっとルーム」という空間を配置した場合の実践】

<p>【計 画】</p>
<p>生徒がほっとできる空間を目指し、環境整備を行う。 学習機能として活用できるようにする。 友達が来やすい環境にする。 情報を発信できる場所とする。</p>
<p>【実 践】</p> <p>生徒に意見を聞き教職員に協力してもらい整備をした。 「ほっとルーム」登校の生徒に対し、担当者が話を聞きながら一日の計画を決める。授業があいている場合は「ほっとルーム」に行き職員が対応し学習指導を行った。担当者がいないときは一人で自習。 昼休み放課後等、担任の働きかけでクラスの生徒が来て「ほっとルーム」登校生徒と一緒に勉強するようになる。 生徒指導部会で「ほっとルーム」の情報交換をする。</p>

<p>【評 価】</p> <p>環境整備については、教職員の協力により、よりよい空間になった。 「ほっとルーム」が学習の場として使用できるようになったが、生徒一人での自習は様々な問題を生み出した。 人間関係が問題で継続した関係を築くのは難しい。 担任からは生徒が登校できるようになりありがたいという意見があった。</p>
<p>【修 正】</p> <p>についての修正 生徒だけで過ごさせるのは好ましくないという意見が出され、担当者を決め行ってきた。情報が共有できる生徒指導を目指しているので、担当した人が情報発信をするよう確認して行っている。現時点では関係している職員で行うということから、学年とかかわりのある先生をお願いして行っている。 月曜日から金曜日までの昼休みに担当者が「ほっとルーム」担当として「ほっとルーム」に行っている。 についての修正 ピア・サポートトレーニングを計画中</p>

【「ほっとルーム」運営からの学び】

本校で言う「ほっとルーム」とは場所や空間ではない。どこでも「ほっとルーム」になり得るという考え方で実施してきたが、「ほっとルーム」という場所を確保できるのであれば、担当を決め実施することがより効果的であると思う。本校では2学期より実施したが、年度当初の職員会議で時数割りをする際に、「ほっとルーム」担当者を校時表に組み込み、時数を平均化し実施するべきだと思う。本校のように教育相談員やカウンセラーがいない学校は年度当初に組み込んだほうがベストだと思う。

教育相談員・カウンセラー
が配置されていない学校

年度当初の職員会議を中心に、「ほっとルーム」の担当者を決め、時数を平均化

3 チーム援助の取組

5月連休後、登校渋る。担任は家庭訪問や連絡などを行い登校を促す。担任、養護教諭から不登校の生徒の情報は流れていたが、その学年にいる先生方や学校職員はどのように接してよいかかわからない状態が続いた。そこで、協働意識を高め、個人の資源を有効に活用できるように以下の通り計画を立て取り組んできた。

【計画・立案】

生徒指導委員会でチーム援助について説明・理解を得る。

校内研修で、不登校対策支援資料をもとに説明。全職員の共通理解を得ることを目的とする。

学年会で参考資料をもとに学年で研修する。

生徒の実態に応じ、チームをつくりチーム支援を進める。

【実践】

生徒指導部会で説明、学校全体で進めていくことを提案。承認。

校内研修にて説明。

先生方からそれぞれの学年で今現在の状況では、やるべきことがある。まずは研究者のいる学年で行い、それを広めて欲しいと要望され、学校としての取組はできなかった。

研究者が所属している学年でチーム援助資料を活用し研修を行う。そこで学年の教員から次のような意見が出た。

- ・「どのようにかかわればいいのか見えてきますね。」
- ・「副担任として、今までどのように接したらよいかいつも迷っていた。こういう会議をもってくれば、自分としてのかかわりが見えてきてやりやすい。」

学年で取り組んだ実践例

今回実施したチームは、研究者が所属していた学年の不登校生徒に対し編成、プロジェクトチームとした。構成員は学年の教員と養護教諭（会議の中にはいないが適応指導教室の先生も連携チームの一員と考えた）。解決した時点でこのプロジェクトチームは解散する。方法は、P（Plan：計画）を立てD（Do：実践）しC（check：評価）しA（Action修正）しながら取り組む方法で行った。そしてこの取組を全校へ発信していった。

以下その取組を紹介する。

ア チーム援助会議での方針と援助案（P）（11月20日：第4回）

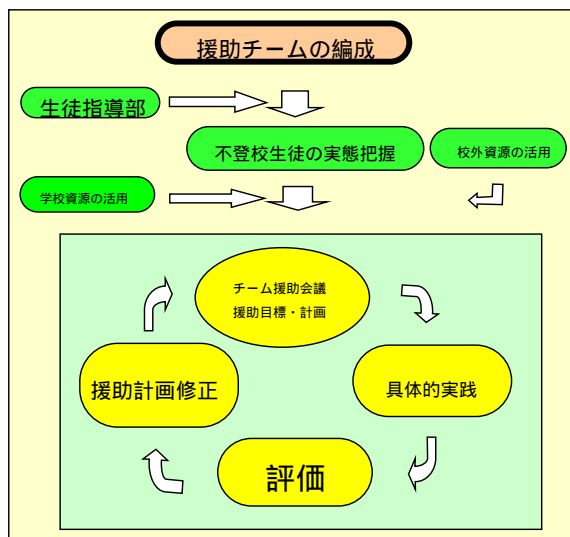


図2 チーム援助の基本的な流れ方

心理面	【概要】
	<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着きがでてきた。・適応指導教室にも2学期以降通い、友達もできてきた。 ・東京学習旅行では友達と仲良く過ごす。特にリーダー的な存在であった。 ・休み時間、学年の生徒が来ている。月・金は来ている。適応指導教室は家庭の事情でいけなくなる。その分学校へ登校する気持ちもある（母親から）。
社会面	【援助目標（方針）】
	<ul style="list-style-type: none"> ・登校刺激は与えず本人の意志に任せ週4日（月・火・木・金）登校できるようにする。・友人とのかかわりは継続して行う。

	<p>【具体的援助案（役割分担）】</p> <p>学級担任：友人とのかかわりはきらさないよう友達を家に行かせる。 養護教諭：年度当初にかかわりが深かったため信頼をだいぶおいている。養護教諭から週4日自分で自己決定できるよう働きかけてもらう。</p>
進路学	<p>【概要・見立て】</p> <p>・学習意欲はある。学年で計画を立てた勉強に関しては順調に行っている。・宿題も自分から進んで取り組む。・期末テストは受ける気持ちはあるがやや不安な面がある。教室は無理そうなので「ほっとルーム」で受けるよう勧めている。</p>
	<p>【援助目標】</p> <p>・計画を立て、本人の負担にならないよう引き続き支援する。</p> <p>・期末テストを受けられるような体制作りを目指す。</p>
	<p>【具体的援助案】</p> <p>・英語は 先生、社会は 先生、学年だけでは対応できないので 理科については 先生にお願いする。あくまでも負担にならないよう生徒の様子をみて学習時間を決める。</p>
	<p>【変容記録】： 期末テストは受けないと自分から言ってくる。待つことにした。</p>
	<p>【概要・見立て】</p> <p>・学校に来るときは歩いて登校。自分でも体力をつけたいと言っていた。</p> <p>・湿疹はでなくなってきた。・学校給食にはまだ抵抗があり、自分で弁当を持参している。3学期は自分から給食を食べられるようにすると言っている。</p>
他	<p>【援助目標（方針）】</p> <p>・継続して様子を見ていく。</p>
	<p>【具体的援助案】</p> <p>・給食は保健室で食べているので引き続き養護教諭にお願いする。</p>
	<p>【概要・見立て】</p> <p>・父親の存在が明らかになり始めてきた。買い物や送り迎えなどしているようである。母親も東京学習旅行を喜んでいて。</p>
父	<p>【方針】</p> <p>・家庭との連携を今後も継続していく。</p>
	<p>【具体的援助案】</p> <p>・引き続き、養護教諭と担任で連携を図り、情報を学年におろしてもらう。</p>

イ 「ほっとルーム」を核としたチーム援助の具体的実践（D）

【学習機能としての実践例】

「ほっとルーム」に登校していればよいかと言えばそれだけではいけない。学校である以上学力を保障する必要がある。チーム援助会議を行い方針を立てる中で、学習できる状況であると判断、学習計画を立て実施した。学年の教員だけでは対応できない場合は他学年の教科の教員、養護教諭にお願いし実施した。内容と時間割は研究者がコーディネーターとし、計画調整等を行い実施してきた。以下その取り組みを紹介する。

基本のスタイル・計画は事前に立てる。

生徒の登校時間やその日の体調により、朝の段階でチームで検討、再計画。

担当の教員が授業実施。

授業内容進度についてファイルに担当者が記入。進度をファイルにしておくことで担当の教員以外でも授業を進められる。（資料3）

生徒にも1日の感想を書かせる。（資料2）

チーム援助会議でファイルに書かれた内容を参考に評価、検討、修正、実施。

資料2 生徒用学習記録

個人学習記録表		12月14日
教科名(上段)・学習内容(下段)	一日感想	
1		
2		
3	理科 圧力	圧力について、スポンジを用いて実験的に行った。雑談を含んで進めたため1時間があっという間でした。
4	英語 乙倉 (会話) 不明な単語	自主学習が進んでいるため説明をすぐ理解した。すぐに授業に追いつける様子。 僅しかり前はわからない
5	英語 乙倉 (会話) 地理・歴史	自主学習が進んでいるため説明をすぐ理解した。すぐに授業に追いつける様子。 自主学習が進んでいるため説明をすぐ理解した。すぐに授業に追いつける様子。
6		
今日の感想		
今日、理科の授業で、スポンジを用いて実験的に行った。雑談を含んで進めたため1時間があっという間でした。		

資料3 教師用学習記録

授業の記録			
教科	項目	やったこと(学習の過程)	感想・気づき
理	圧	圧力について、スポンジを用いて実験的に行った。	雑談を含んで進めたため1時間があっという間でした。
英	英	自主学習が進んでいるため説明をすぐ理解した。すぐに授業に追いつける様子。	雑談を含んで進めたため1時間があっという間でした。

〔 担当者からのコメント 〕

理科：圧力についてはスポンジを用いて実験的に行った。雑談を含んで進めたため1時間があっという間でした。

英語：自主学習が進んでいるため説明をすぐ理解した。すぐに授業に追いつける様子。

ウ チーム援助の評価（C）

教師側：情報が伝わり協力ができ、同一の目標で取り組めた。かかわりの深い養護教諭との連携が深まり、情報がスムーズに流れている。

生徒：本人の意志に任せることを前提に他の教員が理解できているので、負担をかけるような言動はしていない。そのため、本人も自分から決めるよう努力をしている。東京学習旅行に参加でき、事後指導として行っている総合学習のまとめにも参加できるようになった。生徒と養護教諭の働きかけがよい方向にむかった。3学期、教室へ行けるようにまでなっている。

エ 援助計画修正（A）

養護教諭が適応指導教室にA子を連れていき、適応指導教室の先生から今後のことについて話を聞く。学校へもどり翌日チーム援助会議を実施。エコグラムから判断、FC（自由気ままなヤンチャ坊主）NP（世話好き母さん）が低い。ここの部分を高められるようにと言われたので、社会面・心理面の修正を行うことにした。具体的には対人関係能力の育成（「ほっとルーム」機能）を主に計画をたて実践している。

【チーム援助からの学び】

チーム援助を難しく考えない。難しく考えるとなかなか実行に移せない。学年会もチーム援助・生徒指導部会もチーム援助。気になる生徒がいた場合、チーム援助シートの活用が有効。支援シートを使えば、様々な角度から生徒が見え方針が立てられる。方針ができれば一人一人の先生方のかかわりも見えてくる。そして、それを生徒指導部会等で提示できれば各学年に方針が伝わり全校体制で支援でき、学校全体を機能させることができる。

チーム = プロジェクトチーム



学年を超えた、かかわりのある人でチームをつくるのがベスト！！

実践から見えてきたこと

不登校傾向にある生徒やクラスの様子などの実態把握については、生徒指導委員会の定例化や職員会議・校内研修等での報告会で情報の共有ができ、風通しのよい風土にはなりつつある。また、保健室登校・「ほっとルーム」登校生徒の教室復帰を目指しての取り組みについては、プロジェクトチーム（研究者がいる学年を中心）を編成し「チーム援助シート」をもとに、取り組んだ結果、教室に行けるようにまできてきている。

今回は学年を中心にチーム援助を行ったが、この考え方は他学年にも広めるべきであると強く感じている。そのために必要になってくるのがコーディネーター的な役割をする人の存在である。研究者がコーディネーターを務め実施してきたが、研究者がいる学年だけではなく、学校全体を考えプロジェクトチームをつくるのが大切だと思う。不登校傾向の生徒や悩みをかかえている子にとって、相談しやすい先生や、他学年にかかわりの多い教員や公仕などがある。その人たちの資源を有効に使うためにも学校全体で取り組んだほうがより効果的であると感じた。研究者自身がコーディネーターとして全校にかかわれるようになればよかったのだがそこまでできなかったのが現状である。コーディネーター的な役割は難しいが、一人で行おうとせず、学校全体で取り組むのであれば、生徒指導部会のメンバーを有効活用しコーディネーター的な役割をお願いし取り組むことが大切だといえる。

「ほっとルーム」について、本校のように相談員がいないようなケースの場合は年度当初にほっとルーム担当者を校時表に組み込み、チーム援助会議を行いながら進めていくことがより効果的であると考えます。

今後も研究を重ね、不登校傾向・悩みを抱えている生徒のためにも本校のモデルとして情報発信できるよう努力していきたい。

参考文献

- ・群馬県総合教育センター 『不登校問題課題解決支援資料』(2004)
- ・国立教育政策研究所生徒指導センター 『不登校への対応と学校の取り組みについて』(2004)